HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	学・術・道一体医療への日本医療倫理思想の歩み ： 書評 ： 関根透『医療倫理の系譜 ： 患者を思いやる先人の知恵〔改訂版〕』(北樹出版、2008年、240頁及び索引7頁)
Author(s)	尾崎, 恭一
Citation	応用倫理, 2, 38-40
Issue Date	2009-11
DOI	https://doi.org/10.14943/ouyourin.2.38
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51827
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_ozaki_oyorinri_no2.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学・術・道一体医療への日本医療倫理思想の歩み

尾崎恭一（埼玉学園大学）

書評：関根透『医療倫理の系譜 ── 患者を思いやる先人の知恵〔改訂版〕』（北樹出版、2008 年、240 頁及び索引 7 頁）

本書は、著者が早くも 1970 年以来、約 40 年間にわたって続けてきた日本医療倫理史研究の成果を、主に古代から戦前までの期間についてまとめたものである。分析された資料の豊富さ、論及された医療倫理問題の多様さ、対象となった歴史の長さなどにおいて、本書に匹敵する類書は存在しない。さらに、長年の研究から獲得した視点に基づいて、日本の医療倫理思想史上に現れた様々な人物や思想・制度・風潮に対して著者が明確な評価を下しているところに、本書の特長がある。これらの点について、本書の内容を私見を交えつつ紹介することにしたい。なお、本書は医科歯科専攻の学生を対象にしつつ、専門書としての実質をそなえている。また、改訂は難解なテキストにルビをつけ誤植を直すためになされたのみで、内容の変更はない。

まずは、評者の限界と視点について述べておこう。評者は現代の欧米由来の医療倫理を専攻しているが、日本医療倫理思想史については門外漢である。このため、著者が対象として取り上げた人物や思想、制度、風潮そのものについて、著者の説明や判断を専門的に論評することはできない。にもかかわらず、評者があえて本書を取り上げる理由は、著者が捉えた日本古来の医療倫理の特質と、著者が指摘するその現代的意義について考えることは、日本における医療倫理を探求する者にとってきわめて重要だと考えるからである。というのも医療倫理学のような実践的な学問においては、抽象的な理論研究のみに留まるなら、それは現場から遊離した無力な空論となり、存在意義を失ってしまうからである。そうならないためには、一方で医療実践の現状をふまえた研究が求められるとともに、他方でその現状の因って来る過去の実態や思想に関する研究が求められるのである。現に欧米の医療倫理学は、古代ギリシア以来の様々な医療倫理思想と対決し、あるいはそれを発展させ、限定し、克服しながら発展してきた。ところが、我が国では、自らの医療倫理思想史を踏まえた医療倫理研究は例外的な存在に留まっている。この点で、本書が重要な存在意義をもつことは言を待たない。このような認識と視点から、本書を取り上げることにしたい。

さて、本書の中心は、本格的論考として時代順に述べられた九章であり、前後に「はじめに」と「あとがき」、第二次大戦後に触れた簡潔な第十章がある。本論の九章は「古代」（飛鳥以前）、飛鳥、奈良、平安、鎌倉、室町、安土・桃山、江戸、明治～昭和初期というほぼオーソドックスな時代区分に従って論じられている。つまり、政治経済的文化的な社会的転換が、医療や医療倫理の転換（それらの概念転換を含む）と連動していることが叙述されている。ただし分量上は、江戸時代と明治以降が重点的に扱われてこの本論部の半分弱を占め、奈良・平安・鎌倉がそれに

次ぐ詳しさである。また他の時代についても、分量は多くないものの力のこもった記述がなされている。各章の冒頭では、各時代の「概観と背景」が説明され、次にその時代に特徴的な「医療観」あるいは医療や医療倫理の実情を解説し、それから重要な人物の著作や業績の検討に入っていく、というものである。改訂版で資料にルビがたくさん振られたことと併せて、一般には馴染みの薄い人物の業績や思想を門外漢が理解する上で、配慮の行き届いた構成だと思われる。

「はじめに」によると、著者がめざす日本医療倫理思想史研究の目的は、三点である（pp. 12-14)。第一に、現代日本における医療問題解決の道を求め、医療も倫理もともに前提するべき「人間愛」に基づく「人間学」を根底においた「医療倫理学」を模索すること。第二に、日本人の風土と歴史に根差し営まれてきた医療倫理から我々が「共感」し「共鳴できる」部分を掬い上げ、西欧近代の合理性の影響が強い現代日本の医療倫理に生かすために、「日本における医の倫理思想史」を体系的に捉えること。それにより著者が目指すのは、「病気を診るより病人を診」る医療倫理的態度によって「医療者側と患者側との信頼関係」を再構築していくことである。第三に、「他人には幸福の実現を、自分には自己完成の精神を目標とすべきことを教えている」先人に学び「二十一世紀の日本のあるべき医療の倫理」を展望することである、という。そして、これらの問題意識の前提として、著者は「学・術・道の三要素……この三要素が備わってこそ真の医療行為ができる」としている。「学」とは医学、術とは「医術」、そして「道」とは「医学的な道徳や倫理である」(p. 15)。

こうした目的から、著者が本論で取り上げる論点は多岐にわたる。そのいくつかを列挙すると次のようになる。例えば、古今の宗教的救済と医療（病気になる原因を宗教的道徳的な罪に求める考え方は、患者救済を喚起するとともに、病人差別も起した)、古代身分制下の医療官営（一部の医療水準を高めたが、医療格差拡大を招くうえ、薬草採取など医療のために労役を強化することになった)、古代僧医・看病僧・病人の医療倫理（医療者の専断的な医療でなく、患者の自己治療を求めかつ尊重する医療者の思いやりある医療の根底にある相互信頼)、医業と営利（中世の自由診療開始は受療者層を拡大したが、営利主義から粗悪な医療が横行し、その後の各時代では様々な制度作りによりその欠陥の克服が試みられることになった)、外来先進医学への対応（外来医学は有効性から受け入れながら、その倫理観は軽視された。これへの批判として、外来医学の物まねですますべきでなく体験的実証を重んずるべきだとする倫理的自覚が続いた)、医学（科学性)・医術（実効性)・医道（倫理性）三者一体論による全人的医療、戦争と医療（中世以来の敵味方への平等な博愛医療と日赤設立への道)、社会保険創設（貧者への医療保障の追求と、それが大正期と戦前期の二度にわたって戦争遂行目的に絡めとられた問題)、末期の看取りと予後不良告知（思いやりと自己決定尊重、告知の是非や死への従容とした態度)、医師教育と資格付与（医療の質保証責任と研鑽義務)、総体的な医療倫理規範（各時代におけるその考究と教育啓蒙問題)、そして各時代の医師が見せた様々な倫理的行動の紹介とその意義の検討がなされている。

これらの多くについて、学ばされ、また著者の称揚や批判に共鳴させられた。ただ、著者が最も高く評価する医学・医術・医道三者一体論で橋田邦彦に言及した部分について、評者の（浅学ゆえか）理解が及ばないのは、残念である。橋田は、「近衛、東条内閣の文部大臣」を務めた一方で、「学は道に則り、術は道に従う。……夫れ医の道は人の道なり」とし、「病人をみる時に、自分を見ると全く同じ気持ちでみられる気分のできるところに仁がある」と論じていたという（pp.

231-234)。この医療倫理観は、道元の『正法眼蔵』に基づいていたとされる。著者は、戦争については医療の倫理に反するとして他の時代の叙述でも批判し、ここでも「戦争への道は、非倫理的な面を醸成するだけである」と明快な戦争批判を述べている。他方、橋田は学徒まで他国を侵略する戦争に駆り出し、A級戦犯の指定を受けて自殺するにいたった。この点について、彼が基にした『正法眼蔵』論を含めて詳述し解明して頂ければと思う。

これまで、日本の伝統的な医療倫理については、患者の理解や承認がなくても、医療者に患者への思いやりがあったり患者の信頼感があったりするなら、専断的な医療を行ってよいとする、一方的な心情融合倫理を日本的な医療倫理とみなす素人判断が横行してきた。そのせいで、医療者と患者との間で互いの人権を理解し尊重しあう、現代の倫理にふさわしい医療倫理を現場に広め深めることが妨げられてきた。これに対して、著者は長年の歴史研究から豊富な医療実践記録や医療倫理文献を踏まえて、「患者の人権を尊重した『医療倫理』」（p. 236）が日本医療倫理思想史の発展可能性のひとつとして確かに存在していることを確認し評価するに至っている。つまり、著者の日本医療倫理史研究は、我が国の戦前期までの医療倫理思想を、赤十字運動やユネスコの「生命倫理と人権に関する世界宣言」（2005 年）等、現代の「生命倫理」における人権思想との関係で再認識しようとしているのである。それにより、近年の我が国の医療倫理状況を、医療技術の飛躍的発展と外来の生命倫理受容のあり方との関係でだけでなく、我が国の医療倫理の自律的な発展可能性のひとつとして批判的に捉え、本書の目的の一つである「二十一世紀の日本のあるべき医療の倫理」を探求するための足場を構築している。

本書の意義をまとめれば、第一に、前述の本書自身の価値にあるが、第二に、本書は本格的な日本の医療倫理思想史書の嚆矢であり、後進の研究者が日本の医療倫理思想の歴史における人物や文献、思想、制度、実情について研究をするための重要な一里塚となっている点である。今後は、人物や文献、思想、制度、実情などのいずれについても、本書による日本医療倫理思想史の全体像と個々の論考を手がかりにして研究を進めることができる。この点は、著者の個々の見解に対する賛否いずれに至ろうとも、それに関わりなく重要な意義がある。第三に、人権尊重の新しい医療倫理を現代日本において確立し発展させるために、本書は、我が国の医療をめぐる実情の中で医療のあるべき姿を求め、医療倫理の確立のために営々と積み重ねてきた先人（医療者・思想家）の成果を検討し活かす道を示しているということである。もちろん、先行した欧米の人権尊重の生命倫理思想に学ぶのは不可欠であるが、それを医療の伝統や現状の異なる日本で現実化するには、在来の医療倫理思想を無視することはできないからである。

なお、著者が企画している戦後から現在までの我が国の医療倫理系譜論の刊行が待たれるとともに、後進の研究者が本書を踏み台として日本医療倫理史の研究をさらに深めていくことを願って止まない。